

北海道胆振東部地震 厚真町視察
活動報告書

弘前大学ボランティアセンター 学生事務局 垣内雅仁

2018年9月24日・25日、北海道胆振東部地震の被災地である北海道厚真町にて、現地視察およびボランティア活動を実施しました。

9月24日は、まず災害ボランティアセンターが設置されている『厚真町教育委員会 遺跡調査整理事務所』を訪れました。14時頃に到着し、早めに作業を終了されたボランティアの方が活動報告書を手し、ボラセンに戻って来られている様子が見受けられました。ボラセン前に掲げられたボードによると、この日のボランティア活動人数は210名、活動内容としては、家財搬出・廃棄、室内片付け、物置・車庫の片づけ、災害ごみの片づけ、避難所支援・清掃等とのことでした。戻って来られたボランティアの方から、吉野地区の被害が甚大との情報を入手し、早速現地に向かいました。死亡者が出た吉野地区は、通行止めのため進入出来ず、迂回路から地区の被害状況の視察をおこないました。吉野地区は山に沿って住宅が建てられており、その大半が山の中腹から崩れ落ちた土砂により押しつぶされている様子、また道路上にも多くの土砂が堆積している様子が見受けられました。多くの重機により、復旧作業が行われていました。

北海道道235号線を更に東に進むと、長距離に渡って山の中腹から土砂が崩れ、それによって田畑に大量の土砂や倒木が堆積していました。町内の主要道路にも土砂が堆積し、至る箇所で通行止めとなっていました。道道235号線に戻り、ボラセン近くの避難所である、厚真町スポーツセンターに持参したリングジュース2箱を届けたのち、厚真町役場等のある中心部に向かいました。こちらでは地震の揺れによる建物等への被害も大して見受けられず、中心部とその周辺との被害状況の差が印象的でした。

2日目となる9月25日は、厚真町のボランティアセンターで受付をし、活動をおこないました。希望する活動内容に分かれたのち、グループの人数を基準にそれぞれの活動場所に振り分けられました。結果、私たちは10名程のグループで個人宅の倒木の撤去をおこなうことになりました。現地を訪れると、個人宅の裏山が崩れ、畑に土砂と倒木が堆積していました。地滑りにより、土砂が100mほど押し寄せてきたとのことでした。チェーンソーを使える方が倒木を短く切断してくださり、それらを人力で運び、トラックに載せるという作業を繰り返しました。2時間程で全ての倒木を運び終え、活動報告書の提出と他の活動要請を受けるため、ボラセンに戻りました。

戻ると、すぐ次の個人宅が見つかりました。早速現地に向かうと、物置となっていた小屋が倒壊し、多くの災害ごみ如山積みされていました。小屋の屋根や柱、また中に入っていたものを分別し、軽トラックに積み込み、集積場まで運ぶ作業をおこないました。お宅の方も、まさか厚真町でこれほど大きな地震が、と驚かれています。高齢者夫婦のお宅で、大量の災害ごみを自分たちではとても処理できなかったとのことでした。活動終了の予定時刻も迫り、作業を終えたところで、実際に生活されていたお宅を見させていただけることになりました。お宅は地滑りにより数十センチ移動し、玄関側に少し傾いていました。中に入らせていただくと、傾いているのが実感できるほどでした。

今回の視察で、地震の揺れそのものよりも、それによって引き起こされた土砂崩れ、地滑りによる被害が大きかったことを実感しました。また、ボラセンや避難所はマスコミ関係者の立ち入りを禁止しており、外部の受け入れに少々敏感であることを感じ取りました。ボラセンは厚真町のみならず、全道各地の社会福祉協議会等から派遣された方々がローテーションを組んで運営していることが分かりました。

平成30年北海道胆振東部地震による被害の現地調査及び支援活動報告書

弘前大学ボランティアセンター副センター長

李 永俊

9月24日、25日に北海道胆振東部地震で甚大な被害にあわれた厚真町にて現地調査及び災害ボランティア活動を行って来ました。本センター学生事務局2名、教員1名、そして大変嬉しいことに学生事務局のOBである南部真人君が参加してくれました。彼は震災直後から災害ボランティアに自ら参加していたそうです。本センターは平成23年3月11日に発生した東日本大震災を契機に設立され、当時は教員・学生事務局が一体となり災害ボランティア活動を行った経緯があります。そして、彼は9月6日に発生した北海道胆振東部地震の災害ボランティア活動時に東日本大震災での経験を活かし、率先して活動中の改善点を提案して、実践していました。当センターで育っていた卒業生が地域の中でリーダーとして活躍している姿に感謝感激です。

9月24日、千歳空港に着いたのはお昼過ぎでした。すぐにレンタカーに乗り換え、厚真町の災害ボランティアセンターに向かいました。災害ボランティアセンターに着くと、午前中の作業を終えたボランティアが帰りの準備をしていました。

最初に出会ったのは、偶然にも平成28年台風10号の被害に対する岩手県岩泉町の支援活動でお世話になった一般社団法人OPEN JAPANーオープンジャパンーのPさんでした。被害の様子と現在の活動状況などを詳細に伺うことができました。被害が甚大だった地区では二次災害の危険性が高いため、本格的な活動もできない状況であることや、ボランティアの手には負えない深刻な状況のままであることを伺いました。

その後、ご紹介いただいたいくつかの地区を回りました。道路も所々通行止めになっており、移動中にも被害の大きさを実感しました。山が崩れ、生活道路が寸断されていました。また、土砂崩れで民家や物入れなどがほとんど原型が分からないような状況になっていました。

視察のあと、避難所の状況を確認するために、厚真町災害ボランティアセン

ターに戻りました。センターで出会った震災直後から活動を続けているベテランの方が避難所の状況を教えてくださいました。避難所に身を寄せている方がマスコミなどの外部からの訪問者に対しストレスを多く感じていらっしゃるなどの情報もあったので、少し迷いもありましたが、青森から持参したりんごジュースもあったので様子をうかがいに行きました。避難所では引率教員が管理担当者をたずね、事情を説明してリンゴジュースを受け取っていただけないかと尋ねました。担当者からは遠方からわざわざありがとうございますと感謝の言葉をいただき、快く受け取っていただきました。

9月25日は、OBの南部君と合流し、8時半に厚真町災害ボランティアセンターに行きました。ボランティア受付を済ました後、簡単なボランティアのオリエンテーションがありました。その中で担当者からボランティアの方、毎日100名を超えていることと、連休明けにも関わらず25日も100名以上の方が参加して下さったとの報告がありました。オリエンテーションの後、ボランティアニーズとボランティアとのマッチングが行われました。ボランティアの内容は、大きく「避難所の清掃作業」「避難所での傾聴ボランティア」「家財道具や瓦礫の撤去作業」に分けられていました。我々は、「家財道具や瓦礫の撤去作業」に参加することになりました。

最初に派遣されたのは、ボランティアセンターから10分ほどの農家でした。主な作業内容は、住宅の裏の畑に、山崩れで入り込んだ流木の搬出作業でした。北海道の各地から駆けつけてくださった市民ボランティアの10名と我々4名で、全部14名で作業を行いました。現場についてまず驚いたのは、大きな物置が傾いていて、仮の支柱で支えている様子でした。そして、作業現場となった裏の畑は、両側の山が崩れ、真ん中の畑が少し盛り上がっていました。人工的には絶対作れない様子に、自然の力と災害の恐ろしさを改めて実感しました。被災したTさんが、地震発生直後の様子を詳細に話してくださいました。

Tさんによると、地震発生時は突き上げられて、左右に大きく揺さぶられたような感じだったそうです。また、揺れが非常に長かったと話していました。まだ、深夜で真っ暗だったので、被害の全体像がよく分からなかったが夜明けとともに被害状況を見て唖然としたと話していました。

Tさん宅の流木の処理は、順調に進み、午前中に終了することが出来ました。

作業終了の報告書をボランティアセンターに提出し、午後のボランティアニーズの有無を確認したところ、午後もニーズがあるということで、車の中でお昼を済まし、午後の活動に向かいました。午後は町の中心地から少し離れたKさんのお宅でした。Kさんのお宅に向かう道は、所々通行止めとなっており、非舗装道路を歩いていきました。

Kさん宅では、地震で倒壊した納屋の瓦礫撤去作業でした。Kさんのお宅についてまず驚いたのは、玄関先や駐車場などいたる所に亀裂が入っており、地震が強さを改めて実感しました。また、鉄筋コンクリートで作られたと思われる納屋は、大きな鉄筋の柱が横たわっており、瓦礫の山となっていました。作業は稚内市と苫小牧市から参加した若手4名と、弘大ボラセン4名で合計8名で行いました。また、娘さんのお宅に仮住まい中のKさんご夫妻も駆けつけ、一緒に作業を行いました。作業では、本学OBの南部さんが指揮を取り、瓦礫を分別して、処分場に運びました。軽トラック4台分の瓦礫を手作業で片付け、いくぶん綺麗になったなと感じました。作業を完了することはできなかったが、ボランティア活動終了時間、3時となったので作業を終えました。作業後に、Kさんのご案内で、地盤に亀裂が入ったために傾いてしまった自宅の中を見学させていただきました。中の家財道具は既に片付けられていました。室内に入るとひと目で傾いているなど分かるほど、地盤がずれていました。最後はKさんご夫妻に挨拶をし、急いで空港に向かいました。最後までありがとうと手を振ってくださったご夫妻の姿が印象的でした。